山と花のたより　176号

２０１４年８月２８日　松尾忠
メールアドレス　tadashi6414@smile.ocn.ne.jp
ホームページ「新・山と花のたより」で検索して下さい

名峰・北岳を登る

↑間ノ岳への道から北岳を振り返る

土庫病院友の会山歩きクラブの役員登山で北岳と間の岳に登った。７月２２日～２４日間。

北岳は日本第２位の高さ(3193m)を誇る名峰、そして間の岳はつい最近の測量で３１９１m となり、北アルプス奥穂高岳と並んで日本第３位になった高峰。

そしてこの２峰をつなぐ尾根こそ国内最高の稜線なのだ。

異常気象とそれによる大規模災害が頻発した今年、この登山計画も豪雨災害により、計画変更を余儀なくされた。長野県南木曽町で JR 中央線が不通に、さらに甲府から登山口広河原への道が通行止めになったのだ。

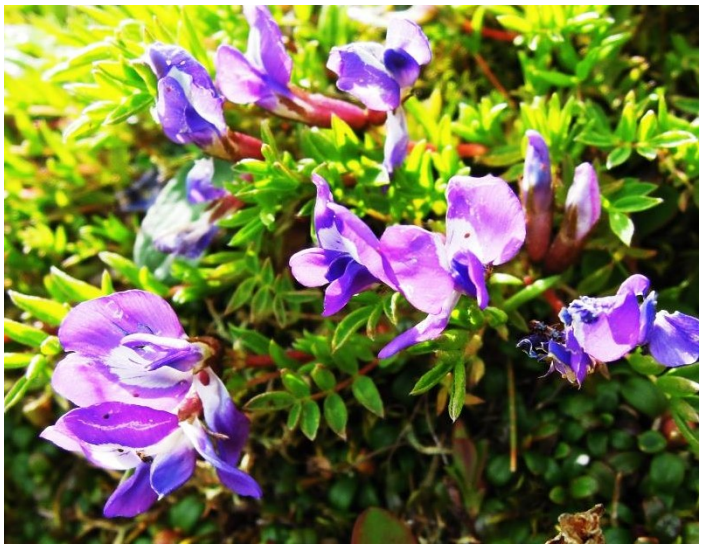
急遽計画を練り直し、静岡から身延に行き、身延から奈良田温泉を抜けて広河原に入った。

↑キタダケソウ(北岳特産)

一日目の行程はここから白根御池小屋までの約３時間、標高差８００メートルの登りだ。大木の生い茂る樹林帯の急登をゆっくりと登る。元気な人たちだが、長旅の影響かやや疲れ気味。それでも御池小屋には予定より２０分も早く着いた。さすがである。

二日目は二つの頂上を極める日、幸いにも晴れ、陽光を浴びて輝く山々を眺め、お花畑の中をのぼるのは何物にも替えがたい幸せ。そしてこの日も確かな足取りで歩き、北岳山頂を踏んだのは１０時過ぎ、正午過ぎには北岳山荘に着いた。午後の間ノ岳(あいのだけ)行きには５人が参加した。

三日目、下山・帰宅の日だが、私の心は揺れていた。自宅を出発する前夜　　、



↓オヤマノエンドウ

弟との電話のやり取りで「残雪の多い今年、大樺沢大雪渓を下りに使うのは危険ではないか」との注意を受けたのだ。そして登山口には「左股コースは落石多く危険」との表示がなされていた。気になって、下って来る何人かの登山者に「雪渓コースはどうでしたか」と訊いたが、いずれも「危険なので回避し、草すべりコースを下って来た」との回答。そして小屋でも芳しい答は得られなかった。やむを得ない。「北岳山頂に登り返し、草すべり

コースを下ろう」と決断し、皆にその旨を伝えた。

この判断は今振り返っても、それしかなかったと思うが、結局参加者には７時間４０分もの歩きを強いることになった。相当疲れたと思う。

コバノイチヤクソウ

しかし、後日、弟にその話をすると「高齢者のグループが、そんな短時間でよく下ったものだ」と感心された。四季を通じてこの山域を歩いている弟から見ても私たちグループの健脚ぶりは称賛に値するものだったようだ。

参加された皆さんご苦労様でした。

ミヤマオダマキ⇒

⇦シナノキンバイ

キヌガサタケ

二上山で　きのこの女王が　次々と

８月上旬から、二上山登山道路傍の竹林でキヌガサタケ(スッポンタケ科スッポンタケ属)が次々と姿を見せている。大きさは１５～２０cm 位、写真に見るようにレース編みのようなマント(菌網)をまとった姿から“きのこの女王”と呼ばれ、中華料理の高級素材「ツースン」として知られている。

頭部に当たる部分は言わば胞子の塊で、グレバと呼ばれ、地上に出て後、白から暗褐緑色に変わり、悪臭を放つ。

この悪臭が様々な生物を呼び寄せる。その生物の代表格が甲虫のシデムシ(死出虫または埋葬虫)の仲間たちで、この虫は自然界で動物の死体を食べたり、埋めてそこに産卵したりする。言わば山の掃除屋さんなのだ。

右下の写真でたくさん群がっているのはベッコウヒラタシデムシで盛んにきのこを食べていた。朝出現したキヌガサタケはこうしてその日のうちに姿を消すのだが、体内外に胞子をたくさん抱えたシデムシらが四散して行き、キヌガサタケの胞子拡散を手伝っているのである。種類の違う生物間で助け合っているわけで、進化の見事さに驚嘆するばかりだ。